JCS NEWS

日本チェロ協会会報 第37号　（2012年3月31日）

日本チェロ協会主催

第２回「チェロの日」開催報告

2012年２月11日（土・祝）・12日（日）の２日間、「日本チェロ協会が贈るチェロ好きのための２日間」という主旨のもと、第２回「チェロの日」が開催されました。

１日目は、チェロ協会会員のプロの演奏家による「チェロ・リレー・コンサート」を２公演、２日目は、「チェリストの集い」と題して、公開マスタークラス、オーケストラ・スタディー（オケスタ）、総勢約80名による全体アンサンブルと盛り沢山なプログラム構成で行われました。以下、２日間の様子をご報告いたします。

2月11日（土・祝）

チェロ・リレー・コンサートⅠ<13:00開演>
チェロ・リレー・コンサートⅡ<18:00開演>

今回、「チェロ・リレー・コンサート」には国内外で活躍されている８名のチェリストの方をお招きし、サントリーホール・ブルーローズにてチェロ・ソナタを演奏頂きました。当日は、２公演合わせて約400名のお客様にご来場頂きました。どの演奏も聴きごたえのある内容で、ピアニストの方と息の合った演奏は、聴衆を惹きつけました。

１日目は、２日目のプログラムにご参加される方もお客様としてご来場頂き、コンサートを存分に楽しんで頂きました。終演後のホワイエでの懇親会には、60余名の方にお越し頂きました。コンサートにご出演された演奏家の皆さんと間近に交流ができるのも「チェロの日」の魅力の１つかもしれません。堤会長、堀副会長のご挨拶を聴かれた後は、参加者は翌日の意気込みを口ぐちにして、演奏への熱意が感じられました。楽しい時間はあっという間に過ぎ、午後10時に１日目は終了となりました。

ルドヴィート・カンタさん

山本　祐ノ介さん

西谷　牧人さん

菅野　博文さん

チェロ・リレー・コンサートⅠより

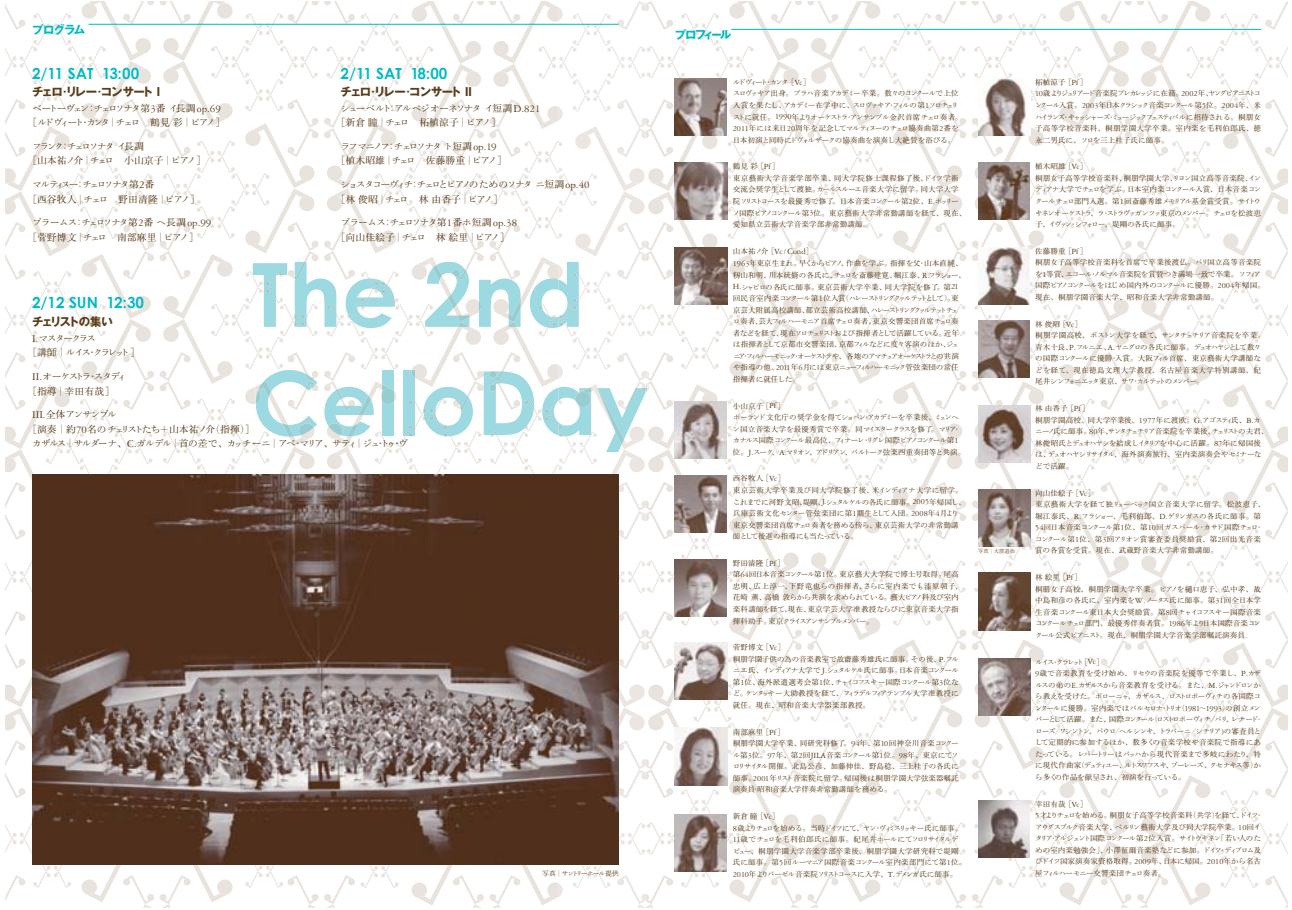
新倉　瞳さん

植木　昭雄さん

林　俊昭さん

向山　佳絵子さん

チェロ・リレー・コンサートⅡより



プログラム

2/11 SAT 13:00
チェロ・リレー・コンサート I
ベートーヴェン｜チェロソナタ第3番 イ長調op.69
［ルドヴィート・カンタ｜チェロ　鵜見 彩｜ピアノ］

フランク：チェロソナタ イ長調
［山本祐ノ介｜チェロ　小山京子｜ピアノ］

マルティヌー：チェロソナタ第2番
［西谷牧人｜チェロ　野田清隆｜ピアノ］

ブラームス：チェロソナタ第2番 ヘ長調op.99
［菅野博文｜チェロ　南部麻里｜ピアノ］

2/12 SUN 12:30
チェリストの集い
I.マスタークラス
［講師｜ルイス・クラレット］
II.オーケストラ・スタディ
［指導｜李田有哉］
III.全体アンサンブル
［演奏｜約70名のチェリストたち＋山本祐ノ介（指揮）］
カザルス｜サルダーナ、C.ボルデル｜首の差で、カッチーニ｜アベ・マリア、サティ｜ジュ・トゥ・ヴ

2/11 SAT 18:00
チェロ・リレー・コンサート II
シューベルト：アルペジオーネソナタ イ短調D.821
［新倉 瞳｜チェロ　桐植京子｜ピアノ］

ラフマニノフ：チェロソナタ ト短調op.19
［植木昭雄｜チェロ　佐藤勝重｜ピアノ］

シュスタコーヴィチ：チェロとピアノのためのソナタ ニ短調op.40
［林 俊昭｜チェロ　林 由香子｜ピアノ］

ブラームス：チェロソナタ第1番ホ短調op.38
［向山佳絵子｜チェロ　林 絵里｜ピアノ］

The 2nd CelloDay

写真：サントリーホール 提供

プロフィール

ルドヴィート・カンタ［Vc］
スロヴィセク出身。プラハ音楽アカデミー卒業。数々のコンクールで上位入賞を果たし、アカデミー在学中に、スロヴァキアフィルの第1ソロチェリストに就任。1990年よりオーケストラ・アンサンブル金沢首席チェロ奏者。2011年には来日20周年を記念してマルティヌーのチェロ協奏曲第2番を日本初演と同時にレヴェルテークの協奏曲を演奏し大絶賛を浴びる。

鵜見 彩［Pf］
東京藝術大学音楽学部卒業。同大学院修士課程修了後、ドイツ学術交流会奨学生として渡欧。カールスルーエ音楽大学に留学。同大学大学院ソリストコースを最優秀で修了。日本音楽コンクール第2位、E.ボッチーノ国際ピアノコンクール第3位。東京藝術大学非常勤講師を経て、現在、愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師。

山本祐ノ介［Vc］Grand
1956年東京生まれ。早くからピアノ、作曲を学ぶ。指揮を父・山本直純、柳山和雄、用松敏夫の各氏に、チェロを斎藤建夫、堀江泰、R.ワランシー、H.シャピロの各氏に師事。東京芸術大学卒業、同大学院を修了。第21回民音室内楽コンクール第1位入賞（ハレーストリングクルテットとして）。東京芸大附属高校講師、都立芸術高校講師、ハレーストリングクルテットチェロ奏者、芸大フルハーモニー管楽アンサンブル指揮者などを経て、現在、ソリストとして指揮者として活躍している。近年は指揮者として京都市交響楽団、京都フルハーモニー交響のほか、ニューアフルハーモニック・オーケストラ等、各地のアマチュアオーケストラとの共演や指導の傍、2011年6月には東京ニューフルハーモニック管弦楽団の常任指揮者に就任した。

小山京子［Pf］
文化庁の奨学金を得てシュパンドカデミーを卒業後、ミュンヘンボーチング文化庁の奨学金を最優秀賞で卒業。同マイスタークラスを修了。マリアカナルス国際コンクール最高位、フィアーレ・リダレ国際ピアノコンクール第1位、J.スーク、J.ヒマオオン、アドリアン、ペルトーク弦楽四重奏団等と共演。

西谷牧人［Vc］
東京芸術大学卒業及び同大学院修了後、米インディアナ大学に留学。これまでに河野文昭、堀剛、J.シュタルケルの各氏に師事。2005年帰国し、兵庫芸術文化センター管弦楽団に第1期生として入団。2008年4月より東京交響楽団首席チェロ奏者を務める傍ら、東京芸術大学の非常勤講師として後進の指導にも当たっている。

野田清隆［Pf］
第64回日本音楽コンクール第1位。東京藝大大学院で博士号取得。尾高忠明、広上淳一、下野竜也らの指揮者、さらに室内楽でも蓮見朝子、花崎 薫、斎藤 資らから共演を求められている。藝大ピアノ科及び室内楽科講師を経て、現在、東京学芸大学准教授ならびに東京音楽大学指揮科助手、東京クラシアンサンブルメンバー。

菅野博文［Vc］
桐朋学園子供のための音楽教室で故齋藤秀雄氏に師事。その後、P.ブルニエ氏、インディアナ大学でJ.シュタルケル氏に師事。日本音楽コンクール第1位、海外被選選考会第1位、チャイコフスキー国際コンクール第5位など、ケンタッキー大師教授を経て、フィラデルフィアテンプル大学准教授に就任。現在、昭和音楽大学器楽部教授。

南部麻里［Pf］
桐朋学園大学卒業、同研究科修了。94年、第10回神奈川音楽コンクール第1位、97年、第28回日本音楽コンクール第1位、98年、東京にてロバサイタル開催。武島奈良、加藤伸佳、野長敏、三上桂子の各氏に師事。2001年ロスト音楽院に留学。帰国後は桐朋学園大学弦楽器嘱託演奏員昭和音楽大学伴奏非常勤講師を務める。

新倉 瞳［Vc］
8歳よりチェロを始める。当時ドヴ内にて、ヤン・ヴィスリッキー氏に師事。11歳でチェロを毛利伯郎氏に師事。紀尾井ホールにてソロサイタルデビュー。桐朋学園大学音楽学部卒業後、桐朋学園大学研究科に進学。氏に師事。第5回ローマ国際音楽コンクール室内楽部門にて第1位。2010年よりバーゼル音楽院ソリストコースに入学。T.デヴィッド氏に師事。

桐植京子［Pf］
10歳よりジュリアード音楽院プレカレッジに在籍。2002年、ヤングピアニストコンクール入賞。2005年日本クラシック音楽コンクール第1位。2004年、米ハイランズ・キャッシャーズ・ミュージックフェスティバルに招待される。桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学卒業。室内楽を毛利伯郎氏、穂坂三男氏に、ソロを三上桂子氏に師事。

植木昭雄［Vc］
桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学、リヨン国立高等音楽院、インディアナ大学でチェロを学ぶ。日本室内楽コンクール入賞、日本音楽コンクールチェロ部門入選。第1回斎藤秀雄メモリアル基金賞受賞。サイトウキネンオーケストラ、ラ・ストラヴァガンツァ東京のメンバー。チェロを松波恵子、イヴァン・シフローン、現職の各氏に師事。

佐藤勝重［Pf］
桐朋女子高等学校音楽科を首席で卒業後渡仏。パリ国立高等音楽院を4等賞、エコール・ノルマル音楽院を賞賛つき満場一致で卒業。フランス国際ピアノコンクールをはじめ国内外のコンクールに優勝。2004年帰国。現在、桐朋学園音楽大学、昭和音楽大学非常勤講師。

林 俊昭［Vc］
桐朋学園高校、ボストン大学を経て、サンタテレサ・ケアー音楽院を卒業。青木十良、P.ブルニエ、A.ドニエフの各氏に師事。P.オーヤンスを主とする国際コンクールに優勝。入賞。大阪フル管楽、東京藝術大学講師などを経て、現在徳島文理大学教授、名古屋音楽大学特別講師、紀尾井シンフォニエッタ東京、サワ・カルテットのメンバー。

林 由香子［Pf］
桐朋学園高校、同大学卒業後、1977年に渡欧。G.アゴスティ氏、B.ネニー氏に師事。帰国、サンタテレサ・ケアー音楽院を卒業後、チェロスキの夫君、林俊昭氏とデュオ・ヤンスを結成し、イタリアを中心に活躍。87年に帰国後は、デュオ・ヤンスサイガ6、海外演奏旅行、室内楽演奏会やセミナーなどで活躍。

向山佳絵子［Vc］
東京藝術大学を経て独ミュンヘン国立音楽大学に留学。松波恵子、堀江泰氏、R.フラシーニ、毛利伯郎、D.ゲリンガスの各氏に師事。第5回日本音楽コンクール第1位。第10回ガスパール・カッシャ国際チェロコンクール第1位。第3回アリオン賞審査委員奨励賞、第20回出光音楽賞の各賞を受賞。現在、武蔵野音楽大学非常勤講師。

写真：大関嘉彦

林 絵里［Pf］
桐朋女子高校、桐朋学園大学卒業。ピアノを植口恵子、弘中孝、故中島和彦の各氏に、室内楽をW.ノーダス氏に師事。第3回全日本学生音楽コンクール審査委員会奨励賞、最高位チャイコフスキー国際音楽コンクール第1位。第3回アリオン賞審査委員奨励賞、第20回出光音楽賞の各賞を受賞。1986年より日本国際音楽コンクール公式ピアニスト。現在、桐朋学園大学音楽学部嘱託演奏員。

ルイス・クラレット［Vc］
9歳で音楽教育を受け始め、リセウの音楽院を優等で卒業し、P.カザルスの孫のE.カザルスから音楽教育を受ける。また、M.ジャンドロンから教えを受けた。「ボローニャ、カザルス、（ロストロポーヴィチ）の各国際コンクールに優勝。室内楽ではパルセロナトリオ（1981～1993）の創立メンバーとして活躍。また、国際コンクール（ロストロポーヴィチ／パリ、レナード・ローズ／ワシントン、パロロ／ベルシンキ、トパリーニ／ペナリア）の審査員として定期的に参加するほか、数多くの音楽学校や音楽院で指導に当たっている。レパートリーはバッハから現代音楽まで多岐におよび、特に現代作曲家（ダッティユー、ルトスワフスキ、ブーレーズ、クセナキス等）から多くの作品を献呈され、初演を行っている。

宇田有哉［Vc］
5才よりチェロを始める。桐朋女子高等学校音楽科（共学）を経て、ドイツ・アカデメスブルク音楽大学、ベルリン藝術大学及び同大学院卒業。10回イタリア・アベジェント国際コンクール第2位入賞。サイトウキネン「若い人のための室内楽勉強会」、小澤征爾音楽塾などに参加。ドイツ・ディッパム及びドイツ国家病舎賞受賞歴。2009年、日本に帰国。2010年から名古屋フィルハーモニー交響楽団チェロ奏者。

2月12日（日）
チェリストの集い<12:30開演>

公開マスタークラス

２日目は、プロ、アマ問わず、チェロ愛好家の方が一堂に会する参加型のプログラムが進められ、聴講のお客様にも多数ご来場頂きました。まず始めのプログラムは、「公開マスタークラス」です。世界的にご活躍されている、ルイス・クラレットさんを講師としてお招きし、通訳には、高島まきさんにご協力頂きました。今回は、音楽大学在学中のお２人が受講されました。

伊東　裕さん

クラレット先生は２人の受講生に対して、それぞれの個性に合わせてレッスンされ、技術面だけでなく、精神面に対しても細やかにご指導され、聴講している方々にもとてもわかりやすく伝わってきました。会場には熱心にメモをとりながらお話を聞いている方もおられました。

これより受講者のレポートをご紹介いたします。

受講レポート

伊東　裕さん（S－102）東京藝術大学 在学中

日本チェロ協会からのお知らせに今回の公開レッスンのことがあったので是非クラレットさんに教わってみたいと思い応募しました。受講曲目は無伴奏ということでしたので、ちょうど取り組み始めたバッハにしようと決めました。

公開レッスンの一週間前にクラレットさんのバッハのコンサートがあったので聴きに行きました。勢いがあって若々しく、しかし精妙な素晴らしい演奏でした。

公開レッスン当日、緊張しながらもバッハ３番のプレリュード、アルマンド、サラバンドを弾きました。先生がまずおっしゃったことは右手の使い方でした。「弓が暴れている、手首と肘は平行に動かす、ピチカートのように発音する」、などなどやはり主に右手のことを注意して頂きました。先生も弾いて見せて下さったのですが、間近で聴くと先生の音に驚きました。何と言うか１メー

トルも離れていないはずなのにもっと奥の方からホール全体に響いて聞こえる感じがしました。ダウンボウもアップボウも、A線もC線も満遍なく響いていました。

自分の課題は以前から右手右腕弓の持ち方使い方だったのですが、今回も右手のことを色々教えて下さり、今の自分にとても重要な素晴らしいレッスンでした。先生は最後に、「たったこれだけの時間に伝えられることはほんの僅かで、私はいくつかのヒントを投げかけてあげることしか出来ない。あとはあなたが自分で試行錯誤して自分のものにしていくしかありません」とおっしゃいました。これから様々な場所に行き、様々な先生に教わってみたいと思っていますが、そこでどれだけのことを得られるかは自分の応用力だと思います。もう学生でいられる時間もそんなには無いので、一つ一つの発見を大事に勉強していきたいと思います。

鈴木　皓矢さん（S−061）桐朋学園大学　在学中

今回、ルイス・クラレット先生のレッスンを受けさせて頂いて学んだことは、私にとってとても大きな変化をもたらすきっかけとなりました。

一つは、脱力です。はじめにBachの無伴奏組曲６番のアルマンドとジーグを通した時、やはり無意識のうちに力が入り音が上手く飛びませんでした。クラレット先生が私の弾いている姿を見て、首に力が入っていることを指摘されました。そして、先生が首の力を抜きクネクネさせながら弾いて見せて下さいました。私も真似して弾いてみました。すると、今までと違い音がよく飛ぶのが分かりましたし、弾けなかったパッセージも驚くほど楽に弾けるようになりました。

そしてもう一つは、左手の指の独立です。これも、基本的なことではありますが、クラレット先生の左手の独立性は見ているだけで、あぁこれが本当の意味での独立性ということだなとよく解りました。聴こえてくる音一つ一つが玉のように聴こえてくるのです。この二つのことを磨きあげていくことで力では出せない芯のある艶やかな音が出せるのだと思いました。脱力をすることで、テクニック的なことだけでなく、Bachのフレージングなども自ずと見えてきました。

今回の公開レッスンで学んだことは全ての音楽に活かせることであり、これからどんどん磨いていこうと思います。ありがとうございました。

鈴木　皓矢さん

オーケストラ・スタディ

続いては、「オーケストラ・スタディ」です。チェロ・コングレスの中で初の試みとして行ったオケスタを、引き続き「チェロの日」でも取り入れました。今回は、名古屋フィルハーモニー交響楽団チェロ奏者の幸田有哉さんにご指導頂きました。司会には前回同様藤井直さんにご協力頂きました。

ご指導頂いた幸田さんにお話を伺いましたので、ご紹介いたします。

オーケストラ･スタディの公開レッスンを終えて

幸田　有哉さん（R−278）

最初にお話を頂いて、課題がpizzicatoと聞き、「なかなかマニアックな課題だな。」と思い、皆様の要望にお応えできるか不安でした。一般的にオーケストラ・スタディ（以下オケスタ）を習うとしたら、運命の２楽章やモーツァルトのフィガロ結婚序曲など、目立つ箇所や難しいパッセージを選びます。Pizzicatoという限定された奏法のオケスタは、教える側からしてみたら、まさに未知の領域でした。

しかし、だからこそ研究する価値があり、チェロを愛する人達が集まる会で、この未知なる課題を皆と一緒に考え、深めることは、とても有意義で幸せなことであると思い、引き受けさせていただきました。

大人数が納得する内容を考えるのは、容易なことではありません。経験不足な私からしてみたら尚更でした。90分という時間で、自分は何が出来るのか、何を重視するのか、何を求められているのか。そして、当たり前のことですが、pizzicatoについて、自分が知っている事以上に深く研究しなければなりません。進行の仕方や曲目など、考えなければならないことは山積みでした。

作曲家の意図を重視する内容か、奏法を重視する内容か、長い間悩みましたが、最終的に奏法重視の内容にしました。課題が「pizzicato」と奏法をテーマにしておりますし、オーケストラにとっての作曲家の意図は、指揮者の解釈が大部分を占めます。

奏法を重視する場合、やはりpizzicatoの基礎を中心に、

オケスタ講師の幸田　有哉さん

オケスタの様子

オケスタの様々なパターンで試してみたら面白いのではないかと思い、違う奏法の８曲を用意してみました。指や腕の使い方、弦のはじく方向や場所、タイミングなどに気を付け、それを音楽的内容と結びつける。あとは、その場の反応を見ながら進行することにしました。

当日、うまくいくか不安でしたが、いざ始まるとそのような不安もなくなり、とても楽しい時間を過ごすことができました。全員が「チェロを愛している」「音楽が大好きだ」という空気が、会場を温かくしてくれていたからだと思います。反応も素晴らしく、少し説明するだけで、音がすぐに美しくなりました。その一人一人が真剣に音楽に取り組む姿を見て、ただただ感動致しました。本当にあっという間の90分でした。改めて、音楽って良いなぁと思いました。

音楽は、いつも私達に大切なことを教えてくれ、同時に色々なものを与えてくれます。

特にオーケストラは、様々なものを私に与えてくれました。共に弾いている仲間の音楽や、作曲家や作品の世界観、指揮者の音楽、そして自分自身の再発見など、数知れません。

また、大勢の演奏家と大勢の聴衆が、音楽という媒体を通して、同じ世界に浸ることが出来るのも、オーケストラの魅力なのかもしれません。

オーケストラの一奏者として、一チェリストとして、人々の心に届く素晴らしい音楽を奏でて、多くの人に聴いてもらいたい。そしてまた、このチェロを愛する人達が集まる会で、お会いできればと願っております。

ルイス・クラレットさん

特別プログラム　招待演奏

いよいよ「チェリストの集い」も終盤に差し掛かり、全体アンサンブルの演奏に向けて参加者がチューニングを行っていると、そこに特別プログラムのアナウンスが入りました。チェロの日ならではのサプライズプログラムの始まりです。

岡本　侑也さん(S-104)

上村　文乃さん(S-081)

特別プログラムでは贅沢にも３人のゲストの方々に演奏頂きました。お１人目は『2011年第80回日本音楽コンクール本選会第一位』に入賞された岡本侑也さんです。曲は、黛敏郎の「文楽」です。チェロにはこのような音色があったのかと思うほど日本特有の音を素晴らしい演奏で表現しておられました。続いては、『2011年第65回全日本学生音楽コンクール第一位』に入賞された上村文乃さんです。曲は、バッハ作曲の「無伴奏チェロ組曲第３番より」です。会場にはチェロの音色が響きわたり、上村さんの息遣いも伝わって、その力強い演奏に引き込まれました。最後に、今回マスタークラスの講師でおられたルイス・クラレットさんによる演奏です。曲は、エンリック・カザルス作曲「無伴奏チェロ組曲」です。初めに、「私は、エンリック・カザルス（彼はパブロ・カザルスの弟だがチェリストでなない）に音楽の道しるべとして教えを受けてきた。これから弾く曲は、パブロ・カザルスが亡くなった年に、私の師であるエンリック・カザルスが偉大な兄へのオマージュとして書いた作品である。」とご挨拶を述べられ、静かに演奏を始められました。クラレットさんのお人柄が滲み出るような、温かく、そして力強い演奏でした。

思いがけないゲスト演奏に、皆さま大感激の面持ちでした。ご出演頂きまして、本当にありがとうございました。

全体アンサンブル

これで本当に最後のプログラムです。最後はチェロ協会会員（58名）、応募された非会員の方（17名）総勢75名による全体アンサンブルの始まりです。演奏には、チェロ協会の堤会長を始めとし、中島先生、山崎先生、倉田先生、１日目にご出演下さった新倉瞳さんや植木昭雄さん、２日目に講師をして下さったルイス･クラレットさん、幸田有哉さん、特別出演下さった岡本侑也さん、上村文乃さんも加わり、錚々たる顔ぶれでの演奏となりました。指揮は、１日目にご出演頂いたた山本祐ノ介さんです。今回もチェロコングレスに引き続き名指揮者振りを発揮頂きました。

曲は、カルロス・ガルデル「首の差で」、カッチーニ「アベ･マリア」、カザルス「首の差で」、サティ「ジュ・トゥ・ヴ」です。総勢75名による全体アンサンブルはまさに会場と一体となり、チェロの響きで満ち溢れました。

参加者の声をご紹介いたします。

参加者の声

吉岡　明彦さん（R－327）

2011年のチェロ・コングレスをきっかけに入会し、「チェロの日」は今回初めて参加しました。８年前にチェロを始めた頃は「いつかはアンサンブルに加われたら」と思っていましたが、それが今ではこんなに大勢のチェリストとつながり、しかも日本を代表するチェリストの方たちとも同じ響きに加わり、交流する機会に恵まれるとは思っていませんでした。

全体アンサンブルの自主練習には、全６回のうち２回参加しました。こうした機会は事前に練習すればしただけのものが本番から持ち帰れると思うのと、みなさんと交流できること自体が楽しみなので都合さえつけばもっと参加したかったところです。一度は思いがけず山本祐ノ介さんが現れて熱く指導して下さり、やはり１年前のチェロ・コングレスの練習とサントリー大ホールのステージ

での感動を思い出しました。

全４曲のパートはすべて２番。「サルダーナ」（カザルス）は、チェロ・コングレスで弾いた５番パートと共通する動きも多いので、１年前に苦労して練習したことが役に立ちました。他の３曲（ガルデル「首の差で」、カッチーニ「アヴェ・マリア」、サティ「ジュ・トゥ・ヴ」）はどれもまた仲間と合わせてみたい曲です。

全体アンサンブルのある２日目朝、リハーサル直前に会場に着いたところ、すでにほぼ全員が席について黙々と音出し中。聞けばほとんどの方が開場と同時にスタンバイしていたのだとか。前日のリレーコンサート後の懇親会で新倉瞳さんとお話ができて有頂天になっていた気分が一気に引き締まりました。

席配置はブルーローズを広く使って余裕があり、パートが前後にも組まれていたため、ほぼどこに座っていてもプロのどなたかがすぐそばだったり、姿がよく見えたりしました。堤剛先生のAの音に皆で合わせる時のなんともいえない感激…。

皆、真剣な表情。この「まじめ」なチェリスト達の大アンサンブルに「首の差で」、「ジュ・トゥ・ヴ」といった「おしゃれ」な曲目のとりあわせがなんだか微笑ましく絶妙だったように思います。演奏では、人数は少ないはずのプロの先生方の音の豊かさにはすっかり圧倒されました。こういう時いつも、プロの方が音を奏でる行為と、自分が神経質に音を探るようにするそれとの決定的な差を感じます。本番前、客席に宮田大さんの姿も発見。自分が演奏する側にいて、客席で宮田さんが聴いているなんて！そのことが愉快で帰って皆に自慢してしまいました。

全体アンサンブルの前に受講した幸田有哉さんによるオーケストラ・スタディは、普段まとまって指導を受けることのないピチカートに焦点を当て、オーケストラの代表曲を例に、求められる音に応じた指や弾く位置・方向の使い分けの解説が大変有益でした。

このような貴重な機会を作ってくださったチェロ協会の役員・スタッフの方々に感謝申し上げます。次の機会にも、また少し上達して参加できるよう練習に励みたいと思います。

第2回「チェロの日」を終えて

渡邊　亮さん（R−240）

私の日本チェロ協会との出会いは2005年に神戸で開催された“インターナショナル・チェロ・コングレス・イン・神戸2005”でした。それ以来、2010年の“第１回チェロの日”や、昨年開催された“チェロ・コングレス・イン・ジャパン”でも、会員の一人として企画のお手伝いをさせて頂きました。今回のチェロの日でもスタッフの一人に加えて頂きましたので、そのような視点から振り返りたいと思います。

初日のリレー・コンサートでは、８曲のチェロ・ソナタを８人のチェリストがそれぞれ演奏されました。各地で活躍される８人の演奏を１日で聴くことが出来ること自体が貴重ですが、聞き手の多くもチェリストという環境は、チェロの日ならでは。ただ、少し残念だったのは、まだ客席に余裕が見られたことです。もっと多くの会員の皆さんとお目にかかれれば幸いでした。

２日目の「チェリストの集い」も、チェロ協会らしい１日となりました。特に、次代を担う若いチェリストと共に、多くの愛好家が同じ時間を過ごしたことは素晴らしいことだと感じました。冒頭のマスタークラスは、チェロ奏者として生きて行かれる２人の音楽大学生と、学生の育成に対する熱い思いを持ったルイス・クラレットさんとの真剣勝負の場でした。続くオーケストラ・スタディでは、第１回チェロの日でもご指導頂いた幸田有哉さんに、「オケ曲におけるピチカートの弾き方」という、ユニークなテーマをご指導頂きました。選曲やスタディの進め方の段階から幸田さんに関わって頂いたとのこと。若きオケマンと愛好家による学びあいの場となっていました。続いて、クラレットさんに加えて岡本侑也さんと上村文乃さんがサプライズで演奏をしてくれましたが、今後ますますのご活躍を見守って行きたいと思いました。チェロの日の締めは、今年も約80人の参加者によるアンサンブル。山本祐ノ介さんによるタクトの下、会員・非会員、プロ・アマ、そして年齢を超えたメンバーが集まって、一緒にチェロを奏でました。

日本チェロ協会の設立趣旨を読むと、その目的は「プロ、アマを問わず広く一般のチェロ愛好家を会員としチェリストの親睦を図る」こと、そして「チェロの楽器としての発展性を探ること」としており、そのために「次代を担う若いチェリストの育成に協力」することや、「海外のチェリスト、チェロ協会との交流も推進」することが謳われています。その点で、チェロの日はチェロ協会のイベントらしい２日間になったのではないか、と思います。

一方で、課題も感じました。一つは、会員の皆様の参加が期待した程多くなかったことから、より多くの会員の皆さんが参加したいと思えるようなイベントを作ること、もう一つは継続的に活動を続けていくためのチェロ協会の体力強化です。どちらも難しい課題ですが、みんなで知恵を出し合うことが出来ればと思います。

チェロ協会のイベントは、出演された演奏家の皆さん、事務局やスタッフの皆さんをはじめ、多くの人々が手弁当やそれに近い状態で作り上げられています。それは、皆さんがチェロを愛してやまないからこそ、実現しているのでしょう。このような貴重な時間を今後も続けていけるよう、チェロ好きの一人として、これからもお手伝いして行ければ嬉しいな、と改めて感じた２日間でした。

今回２日間にわたって開催された「チェロの日」ですが、多くの方のご協力のもと、無事終えることができ、大変感謝しています。第２回「チェロの日」はいかがだったでしょうか。ご来場下さった方々が皆笑顔でお帰りになる姿を見て、イベントの成功を感じることができました。これからさらにご参加される方、ご来場する方が増えることを願っております。 今回、開催に当たり、ご協力頂いた全ての方にこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

チェロサロン開催

2011年10月10日（月・祝）
堀　了介 先生

2011年10月10日（月・祝）に、チェロ協会副会長の堀了介先生によるサントリーホール・リハーサル室にてチェロサロンを開催いたしました。 今回の参加者は、聴講者を含め約40名の大勢の皆さまにお集まり頂け、賑やかなチェロサロンとなりました。

クリニックの受講生は、高橋明さん（R－337）、谷口仁宏さん（R－179）、藤本武司さん（R－361）、平野千世さん（R－329）の４名でした。

まず初めにご自分で選んで頂いた課題曲を弾いて頂き、その後先生からご指導頂きました。受講生のチェロ歴は、約２年から32年と個人差はありましたが、丁寧で情熱溢れるレッスンをして頂きました。楽譜の目の追い方、弓の使い方、手首やひじの使い方などの基本的な技術面に関すること、クレッシェンドやアーティキュレーションなどの曲に対する解釈に合った演奏方法に関することなど、聴講者も身を乗り出して聴く程、とても興味深い内容のものばかりでした。受講生は短い時間の中でそれらを吸収されているようでした。

クリニック４名終了後は、休憩を挟んでアンサンブルの時間です。曲は、カルロス・ガルデル作曲の「首の差で」です。

あらかじめパート分けをして楽譜をお配りしてありましたが、チェロ協会では初めて取り組む曲目でした。先生は、一度演奏全体をお聞きになってから、パートごとに重要な音はどこか、何小節目がいかに曲の持ち味を出すのか、メロディーが生きてくるための音の響かせ方などについてご指導されました。そして、どんな曲でも演奏者の解釈、つまり「イメージ」を持って演奏することが大切で、アンサンブルというのはパート同士の「対話」であると仰っておられました。最後には、参加者のそれぞれ持つイメージがかたちとなり、タンゴらしさが伝わってくる演奏となっていました。

チェロサロン終了後の懇親会ではクリニックやアンサンブルに関する質問や、その他チェロに関する会話が飛び交い、楽しく有意義な時間を過ごされていました。

今回、昨年のチェロ・コングレス直後のイベントということもあり、ご参加された方々の積極的な姿勢を感じられ、とても充実した内容となりました。ご参加頂いた皆様、ご協力頂いた皆様に心より感謝申し上げます。以下に受講レポートをご紹介します。

チェロサロンの様子

受講レポート

谷口　仁宏さん（R－179）

日本チェロ協会のサロンには久しぶりの参加。ホールに向かう途中で出会った知人によれば、今日のサロンには今までで最高の40人近くが参加予定とのこと。オケやチェロアンサンブルでは、ほぼ毎月のように舞台を踏んでいる私であるが今までにない緊張感で押し潰される。今日の素材は、ラフマニノフのチェロソナタから第１楽章。レッスン２人目、参加者が多く、目の前まで皆さん方が座っているので柄にもなく高まる緊張感！私の番になり、最初のDからEsの音へD線で２の指を滑らしたが、どうも音程が変だ。いきなりの音程外し！失敗に気付いて、最初から弾き直させていただく。楽器も響かず、まったくひどい出来だが、最初のページを何とか弾き終えて、堀先生のお言葉を待つ。

最初のご指導は、序奏の音を長く伸ばす部分、弓を徐々に遅くして音を収めようとするのではなくて、速度はそのままで貧弱な音にならないようにして少しづつ弓の圧力をコントロールするということ。どんな名人でも弓を遅くすると良い音が出なくなるとの堀先生のお言葉に納得！次のご指導は、跳躍前の音に充分に長さを意識することで音楽が非常に豊かになるというもの。そして最後が、テーマの弾き方について、弓の配分として前半で使わず、後半に余裕を残した弓使いを心がけるということ。これによって、２番目の注意事項も余裕が生まれ、後半で弓が足りず音楽に余裕がなくなることも避けられる。これらの３つのポイントは、アマチュアの方すべてに共通することだとだという堀先生のお言葉であったが、私の音が後半はずいぶん良くなったと、聴いていた何人もの方から後の懇親会では言っていただけた。堀先生のご指導が実際に音として顕われ、皆さん方にも参考になったのではないかと思えたが、私自身も今後は、これらのポイントを意識して演奏したいと思う。皆さんも弓使いは計画的に！

今回のクリニックでは、私らしくない私（緊張で上がってしまう）を曝したようで個人的には反省しきり。ただ、堀先生のご指導で自身も随分と得し、皆さん方にもお役

谷口　仁宏さん

に立ったのではないかという意味では充実したクリニックであった。
　長い時間を堀先生には教えていただけて幸せでした。このような機会をいただけて本当にありがとうございました。

平野　千世さん（R－329）
「低音は大切！」

　コングレス後の初めてのチェロサロン故か、過去最高の参加人数だったそうです。私自身、チェロサロンの存在は知っていたものの参加は初めてでした。コングレスで、チェロ歴に関わらずみんなでチェロを楽しみましょう、というチェロ協会の寛大な考え方が浸透し、敷居が低くなったようです。
　アンサンブル曲は、カルデル作曲「首の差で」。最初の合わせは、なんだかバラバラ、皆で顔を合わせて、「これ、タンゴですよね？」といった表情でした。
　堀先生のご指導は、そんな私たちをまるで料理していくかのようでした。伴奏の低音パートはとても大事、リズムをしっかり、と一緒に４パートを弾いて下さり、タンゴのリズムになっていきました。途端にメロディーパートも生き生き。今、どのパートがメロディーで、どのパートを目立たせるべきか考えながら、弾きなさい、と。また、「この曲はどんなストーリー？男女が会話をし、お食事でも？はい、最後はご一緒にと、二人が腕を組んで去っていく、そんな感じですよね。」すっかり、そんな男女がイメージできた私たち、最後の演奏では、ちゃんとタンゴになりました。この日、私が特に勉強になったことは、
①曲にストーリーをつけて解釈してみる
②低音の大切さ：低音に高音がのってきれいなハーモニーになる、低音と高音のバランスは６：４くらい
　堀先生、本当にありがとうございました。後日、第2回チェロの日の案内にこの曲を見つけ、また弾ける！と嬉しかったことは言うまでもありません。

平野　千世さん

◇日　　時　2011年10月10日（月・祝）
　　14：00～16：00（16：30位まで延長）
◇会　　場　サントリーホール・リハーサル室
◇主　　宰　堀　了介　先生
◇参加人数　38名：講師１名、会員26名　非会員11名
　（クリニック参加者４名、アンサンブル参加者27名、聴講のみ10名）

事務局より

○新年度会員更新のお願い

　４月より新年度となりますので、会員の更新をお願いいたします。詳細は同封のご案内をご覧ください。ご入金確認後、本年度の会員証をお送りします。是非本年度も会員継続をお願い致します。
　尚、ご入金にも関わらず会員証が届いていない場合はご一報下さいますようお願い申し上げます。

○ＨＰ掲載情報募集

　会員の皆様のコンサート情報や著作情報など、チェロ協会ＨＰに掲載希望の方はメールまたはお電話でお問い合わせください。

事務局移転のお知らせ

チェロ協会事務局が移転いたしました。ご連絡の際はお間違いのないようお願いいたします。

〈日本チェロ協会事務局〉
〒107－6022　東京都港区赤坂１－12－32
アーク森ビル22階　私書箱509号
Phone：03－3505－1991／Fax：03－3582－1310
e-mail：office@cello.gr.jp
　サントリーホール正面の森ビルです。

編集後記

　第２回「チェロの日」では多くの皆様にお越し頂き、誠にありがとうございました。チェロ三昧の２日間は、これまでにない貴重な経験となりました。力不足な点も多々あったと思いますが、皆様にご協力頂き、無事に終えることができました。ありがとうございました。イベント当日には、出演者の方を始めとし、沢山の会員の方に声をかけて頂きました。『共に「チェロの日」というイベントを創り上げている』という思いを感じることができ、とても嬉しく思います。今後もどうぞよろしくお願いいたします。

日本チェロ協会会報（JCS　NEWS）第37号
2012年３月31日発行
発　行：日本チェロ協会
　　東京都港区赤坂1－12－32
　　アーク森ビル22階　私書箱509号
　　電話 03-3505-1991　FAX 03-3582-1310
発行人：堤 剛
編　集：日本チェロ協会事務局
編集協力：リュウカンパニー